
月刊
FALCOM MAGAZINE
Vol.95
10年前、ハーメル村で
起こった悲劇とは……
英雄伝説
空の軌跡SC
～絆の在り処～
『英雄伝説
暁の軌跡』
イース最新作発表記念
『イース
セルセタの樹海』
ドラマCD
シナリオ再掲載
生まれも育ちも
ザナドゥの住人、現る!?
も～っと集まれ！
ファルコム学園
ファルコムニュース
『イース』シリーズ完全新作が2019年に登場!!
『イースIX -Monstrum NOX-』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



舞台は「絶海の孤島」から「監獄の都市」へ！
『イース』シリーズ完全新作

『イースIX -Monstrum NOX-』が登場!!

「イースⅧ -Lacrimosa of DANA-」から2年。赤毛の剣士アドル・クリスティンの冒険の軌跡を描くアクションRPG『イース』シリーズの最新作『イースIX -Monstrum NOX-』が2019年に登場!! 今回の冒険の舞台はエステリア北東、グリア・エルトリンゲン地方に位置する《バルドゥーク》。"監獄都市"と呼ばれる巨大な街でアドルを待ち受けているものとは!?

タイトル：イースIX -Monstrum NOX-　**ジャンル**：アクションRPG
対応機種：PlayStation®4　**発売日**：2019年予定
プレイ人数：1人　**CEROレーティング**：審査予定

序文

自分ではない何者かになる。
そんな夢を見たことがあるだろうか？
その夢の中で私は考える。
これは自分なのか、自分ではないのか。
夢が現実なのか、現実が夢なのか？
私が辿り着いた答えはひどく単純だ。
『どちらでもいいではないか』
どちらが真実なのか――ではない。
どちらも真実なのだ。

『バルドゥークの檻』本文より～



キーワード

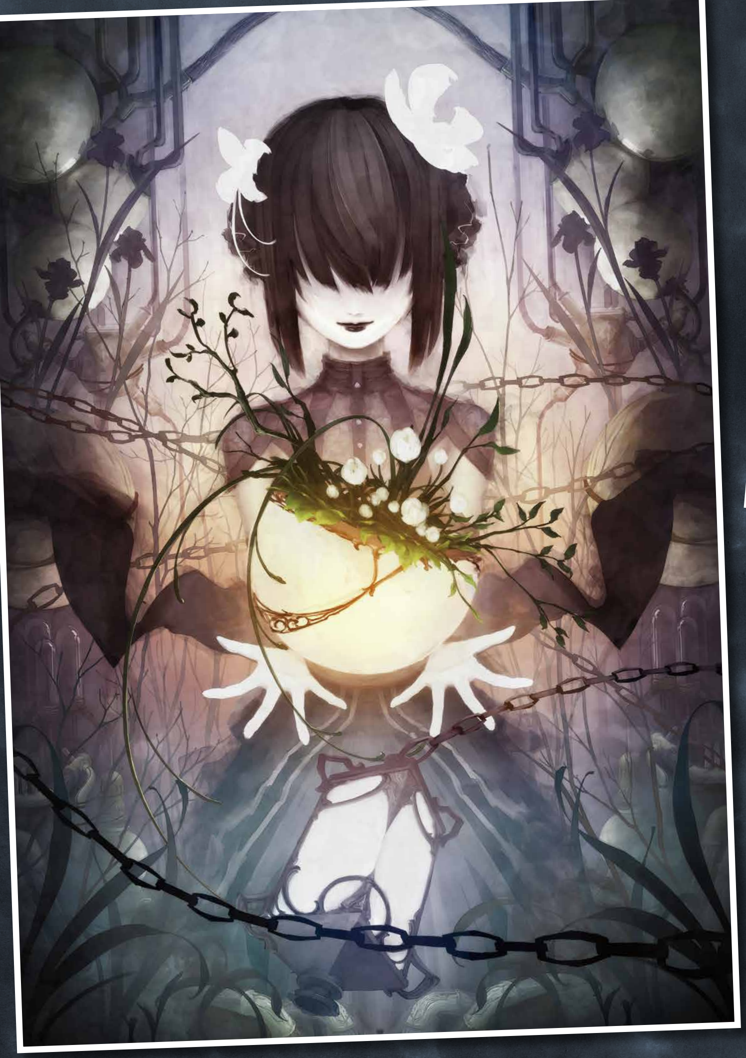
《監獄都市》バルドゥーク

エステリア北東の半島に位置するロムン帝国の属州、グリア・エルトリンゲンの主要都市の一つ。
街中に巨大な監獄があることから《監獄都市》とも呼ばれている。監獄を中心に城壁や堀が張り巡らされ、城塞都市時代の名残も見られる。
また、この地方ではバルドゥークが交通の要衝でもあるため旅人や商品を対象とする宿屋、酒場、交易所などが軒を連ね、近年においては劇場、公衆浴場といった大衆向け施設も充実しつつある。
最近、街中では"怪人（モンストルム）"と呼ばれる者たちが騒ぎを起こしており、住人たちの噂の的となっているようだ。

怪人（モンストルム）

超常的な力を持つ、神出鬼没の奇怪な人物たち。
統率は取れていないらしく、貧しい人々を助ける者もいれば辻斬りを働く無法者もいるなど、その実態は掴めていない。
不思議な力と妙な出で立ちから怪人（モンストルム）と呼ばれ、バルドゥークの住人に恐れられているようだが……。

※画像は開発中のものです。



開発用イメージイラスト。草花が湧き出る半球を黒髪の女性が抱いた、今までの『イース』ではあまり見られなかった雰囲気のイラストとなっている。どこか初代イースを彷彿とさせるような構図となっているのは気のせいだろうか。



“監獄都市”バルドゥークの風景。近作では樹海や絶海の孤島を舞台としていただけに、荘厳な人工物がより圧倒的なスケールを感じさせる。



バルドゥークの城塞都市時代の名残を見ることができる風景。早くこの広大なマップを駆け抜けたい！



『イース』といえばアクション！　見るからに強大な敵に立ち向かっている女性らしき人物はアドルの仲間だろうか？



道化のような表情で迫る敵。なんとも薄気味悪い戦場だ……。こちらにもアドルとは違う新たな人物の姿が。

※画像は開発中のものです。

英雄伝説 零の軌跡
午後の紅茶にお砂糖を

著者:むらさきゆきや
イラスト:窪茶



日本ファルコムの大ヒット RPG『英雄伝説 零の軌跡/碧の軌跡』の主人公【特務支援課】は意外とまったり!? 本編とはひと味違った彼らのゆる〜い毎日を描いて『月刊ファルコムマガジン』で大人気を博したノベライズ作品が単行本で登場!

好評発売中!!

定価:1,100円+税
ISBN:978-4-89610-255-0

発行:フィールドワイ
発売:メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

創業者の加藤が
「いつまでもうちだけが、このままだと思うなよ」
と言ったのを覚えています。 ——近藤季洋



『月刊Falcom magazine』誌上に掲載されたロングインタビューを完全収録。社長・近藤季洋や日本ファルコムのゲームミュージックを演奏するjdkバンドのボーカル・小寺可南子など、ここでしか読めないファルコムの『今』が満載!

- ●日本ファルコム代表取締役社長:近藤季洋
- ●OVA版『英雄伝説 空の軌跡』アニメーション監督・演出家:橘正紀
- ●OVA版『英雄伝説 空の軌跡』脚本家:上江洲誠
- ●ファルコムjdkバンド ボーカル:小寺可南子 ほか

日本ファルコムの『今』と『これから』がこの1冊に!



Falcom Long Interview
ファルコムロングインタビュー

全国書店にて大好評発売中!!

価格:1,155円(税込)
ISBN:978-4-89610-232-1

発行:フィールドワイ
発売:メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

記憶にない顔



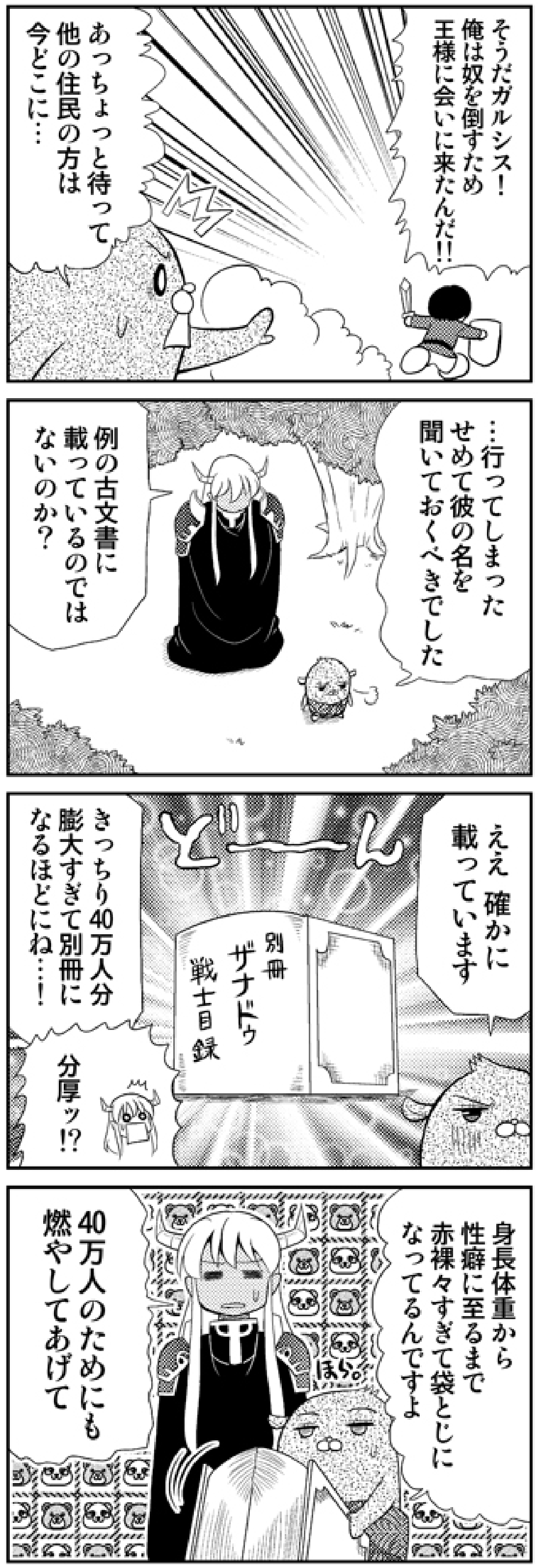
40万の歴史



★あの伝説の出世作、遂に登場!★



あなたのこともきっと…



魔弾



呼び名の境界線



後世の評価



戦士のとまどい



困惑する人たち



通過儀礼



カワイイから正義



タイプ



空しき魔王



悪役



Toshiro&Eiji





発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら⟶www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら⟶www.field-y.co.jp/falcombooks



発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら⟶www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら⟶www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

PS4『閃の軌跡』4本セットも期間限定で登場！
PSストア『HAPPY NEW YEAR 2019 SALE』

2019年1月8日(火)まで開催中！

PlayStation®Storeで、HAPPY NEW YEAR 2019 SALE実施中！
セール限定で、「閃の軌跡Ⅰ」～「閃の軌跡Ⅳ」がセットになった「クアトロパック」も登場！

■セール対象商品



PS4
『英雄伝説 閃の軌跡Ⅰ～Ⅳ
クアトロパック』
➡14,280円（税込）
※PS4版『閃の軌跡』シリーズ4作品がセットになったセール期間中のみの限定商品となります。



PS4『イースⅧ -Lacrimosa of DANA-』
通常30%OFF ➡ PS Plus会員40%OFF



PS4『英雄伝説 閃の軌跡Ⅰ：改
-Thors Military Academy 1204-』
通常10%OFF ➡ PS Plus会員20%OFF



PS4『英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ：改
-The Erebonian Civil War-』
通常10%OFF ➡ PS Plus会員20%OFF



PS4『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ』
通常40%OFF ➡ PS Plus会員50%OFF





PS4『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA-』DL通常版／デジタルデラックス版
通常10%OFF ➡ PS Plus会員20%OFF



PS4『東京ザナドゥeX+』
通常70%OFF ➡ PS Plus会員80%OFF

■商品ページ　https://www.falcom.com/info/?kiji=pssale1812b

日本ファルコム全面監修による公式ビジュアル集

『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA- 公式ビジュアルコレクション』

12月29日(土)発売！



判型：A4判　ページ数：288ページ
定価：本体2,700円＋税
発行：株式会社KADOKAWA

イメージビジュアルや大迫力のカットインをはじめ、各種イラスト、Sクラフト発動ビジュアル、キャラクターデザイン、メカデザイン、エンディングを含むイベントカットなど、関連画稿を一挙収録した永久保存版の画集です。

■GALLERY
イメージビジュアル、電撃PlayStation用描き下ろしイラストなどのキービジュアルを網羅!!

■CHARACTER
Sクラフト発動時のカットインビジュアル、
初期デザインといった、主要キャラクターの関連画稿を多数収録!!

■ARTWORKS
エネミーやメカのデザイン、世界各地のイメージボード、
新クラフトやロストアーツの絵コンテなどを公開!!
もちろん、エンディングビジュアルを含むイベントシーンのイラストも網羅!!

■EXTRA
帝国時報のほか、劇中書籍「ココパンダー物語」「３と９」
「伝説の選ばれし者」「さよならを言えたら」を収録!!

LINE絵文字『ゆるみっしぃ』配信開始！

日本ファルコムのマスコットキャラ「みっしぃ」がゆる～くなって「LINE絵文字」に登場！
友人、知人、家族とのコミュニケーションでちょっぴりゆる～いメッセージを送りたいアナタに最適な絵文字です！



【販売価格】120 円（税込）

■『ファルコム LINE 絵文字』紹介ページ　https://www.falcom.co.jp/mobile/linestamp.html#e01

暁の軌跡

THE LEGEND OF HEROES

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。12月はクリスマスイベントが好評開催中！クリスマス仕様の衣装替えキャラクターにも注目だ。

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

クリスマスイベントシナリオ「新米遊撃士のクリスマス」が実装！

クリスマスを前日に控えたクロスベル市は大賑わい。遊撃士協会も多忙を極める中、クロエはナハトとミシェルが密談を交わしているところを目撃する。あまりにも怪しい２人の態度に協会を出ていってしまうクロエだったが……。
2019年１月４日定期メンテナンスまでの開催なので注意しよう！









12月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



Xmas・ミリアム

ミリアムはサンタ＆クリスマスツリーをイメージした衣装に変身。各所に細かく散りばめられた星飾りや雪の結晶が可愛らしい。ガーちゃんの可愛いコスプレにも注目だ。

ヴィータ・クロチルダ

《蒼の深淵》の名を持つ結社《身喰らう蛇》の使徒第二柱。エマと同じく《魔女の眷属》のひとり。エレボニア帝国の歌劇場でディーヴァとしても活躍している。

仮面・アリアンロード

素顔を出した姿が先に実装されていた《鋼の聖女》アリアンロードの仮面姿。この仮面を脱がせるだけでも苦労した原作ユーザーは数知れず。

Xmas・アガット

サンタ＆トナカイのモチーフをいいとこ取りしたまさにクリスマス仕様の衣装を着たアガット。鍛え抜かれた腹筋がセクシーだ。キャラに似合わず意外と（？）ノリノリである。

1月の新規衣装替えキャラクターは？

※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。


空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
火事…かしら？
大変…！
人手が必要かな…
行ってみようレオンハルト
うん！


こんな
火の気のない
ところで
火事なんて…
だけど
どうして
ターン


え…
トム
おじさん?
ど…
どうしたん
……
きゃあ
ターン

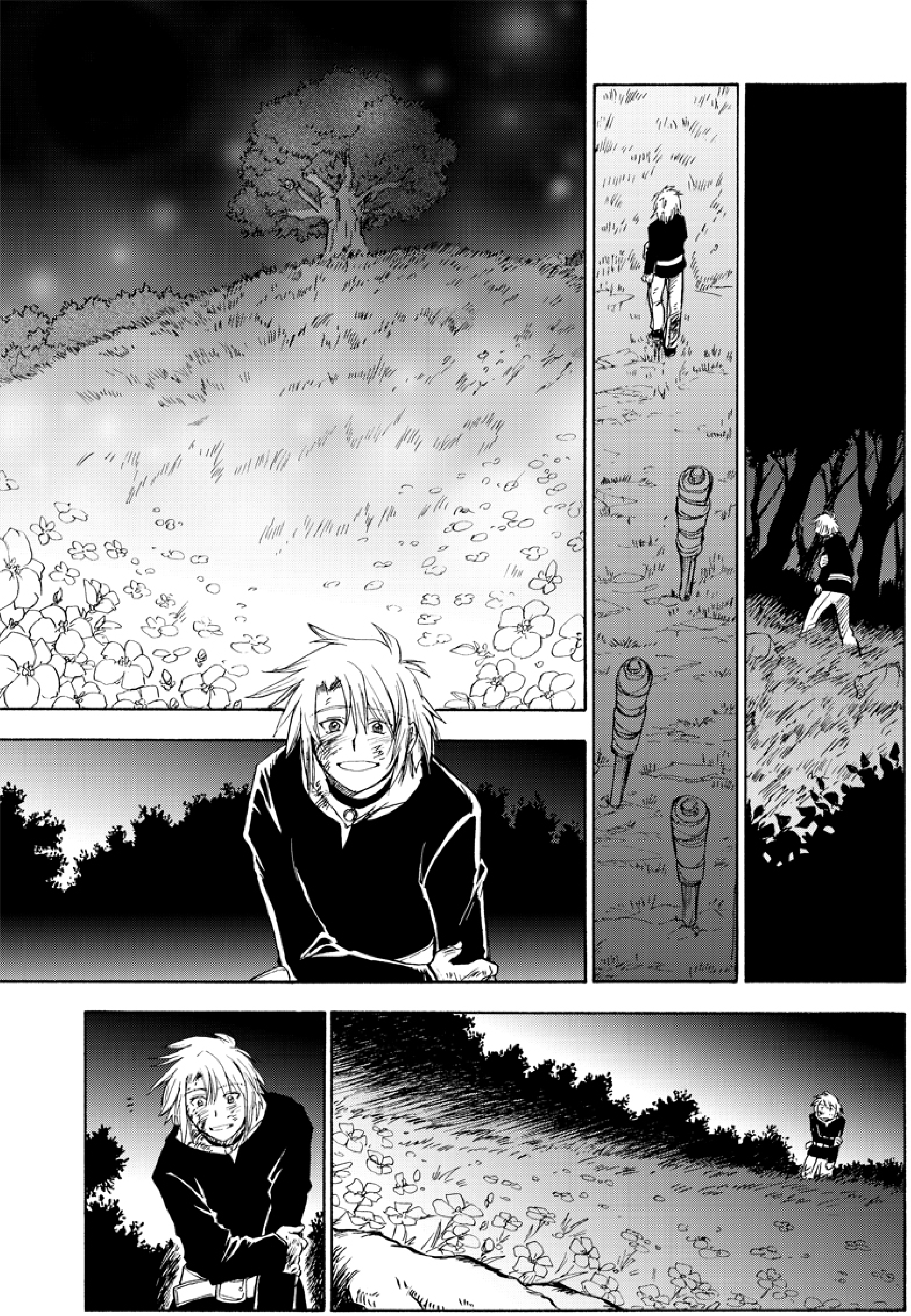

ぎゃあああ
いやああああ
レオンハルト!!

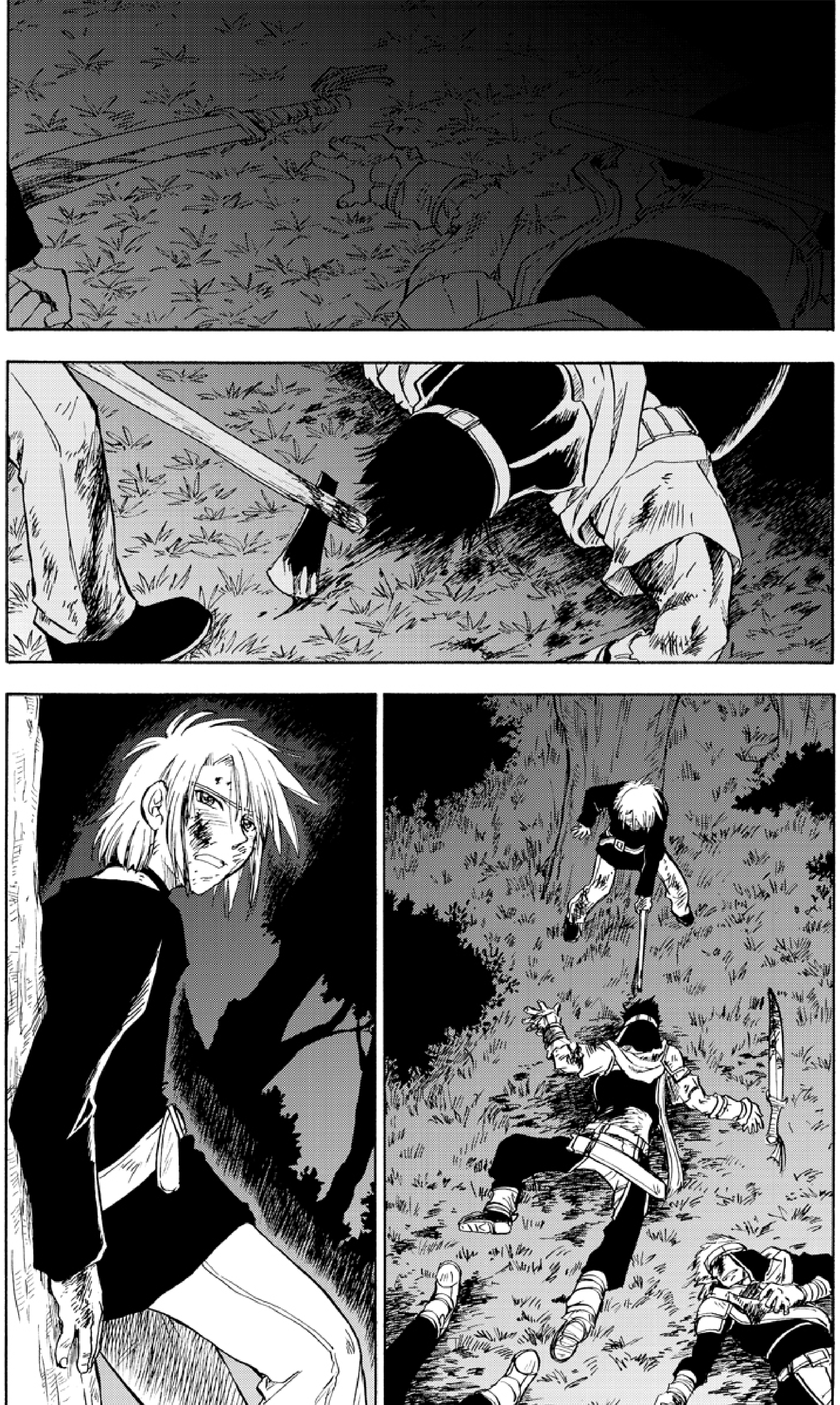
ダーン
ダーン
父さん！
母さん！
これは
いったい…
母さん…！
母さん!!
レオンハルト!!
逃げろ!!
逃げろ!!

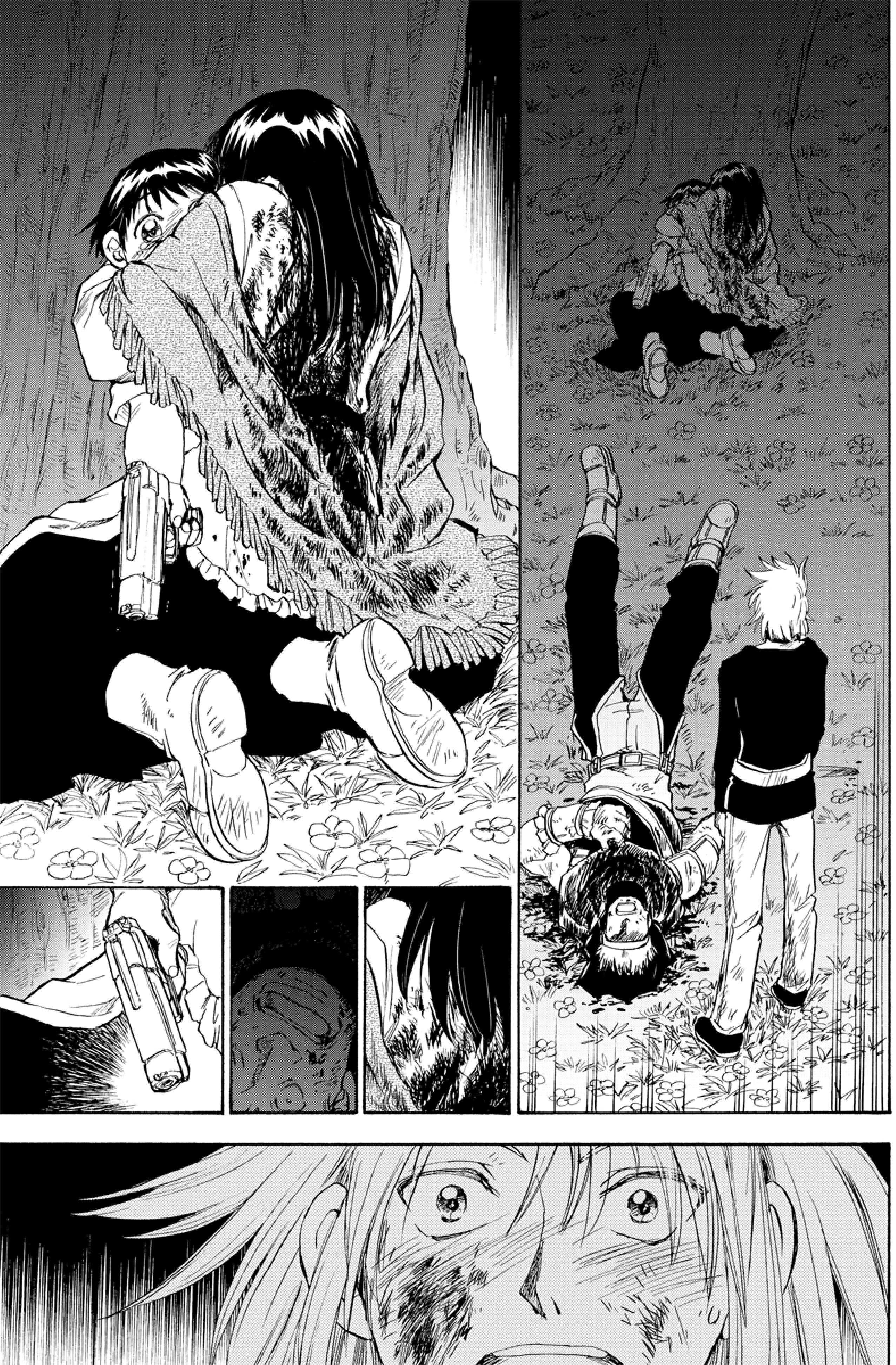

ぎゃあっ
あ
あ
あ…
いったい何が…
いったい何が起きてるんだ
…俺は…


…カリン!ヨシュア!
どこだ!!
カリン!ヨシュア!
レーヴェ…?
レーヴェ…ッ
レーヴェ…!
おとうさんとおかあさんが…
せめてこのふたりだけは
俺は
ふたりを守る!


村の奴らは
ただ一人の例外もなく
殺せ!!
カリン！ここは俺が食い止める！
ヨシュアを連れて先に行ってくれ!!
レーヴェ！だめよ！
いつもの木の下で…！
すぐに追いつくから!!
だっ
ああああん
頑張ってヨシュア
もう少しで村の外だから
聞こえたか!?
ああ！まだ残ってたか



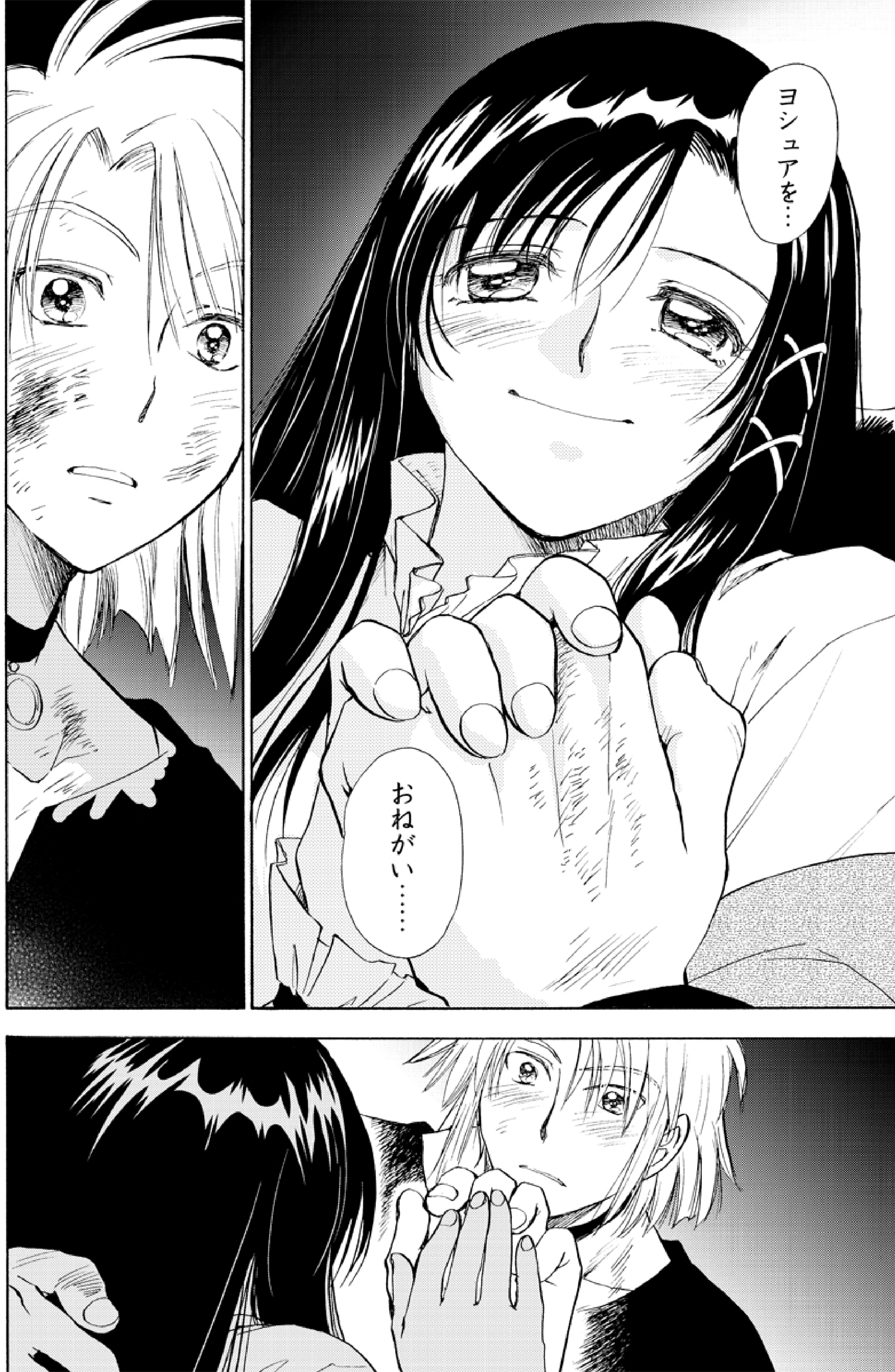







ヨシュア！
カリン！
カリン！
カリン！
しっかりしろ!!
おねえちゃん…
…ヨシュア…
…逃げて…
カリン！
すまない…
俺がもっと早くここに来てれば…
…レーヴェ…


ああ…
よかった…
ヨシュア…
大丈夫よ…
すっ
もう…大丈夫…
大丈夫なんかじゃないんだ!!
しゃべるなカリン!!
今すぐ手当てを…
レーヴェ…


ヨシュアを…
おねがい……

…カリン…
…カリン！

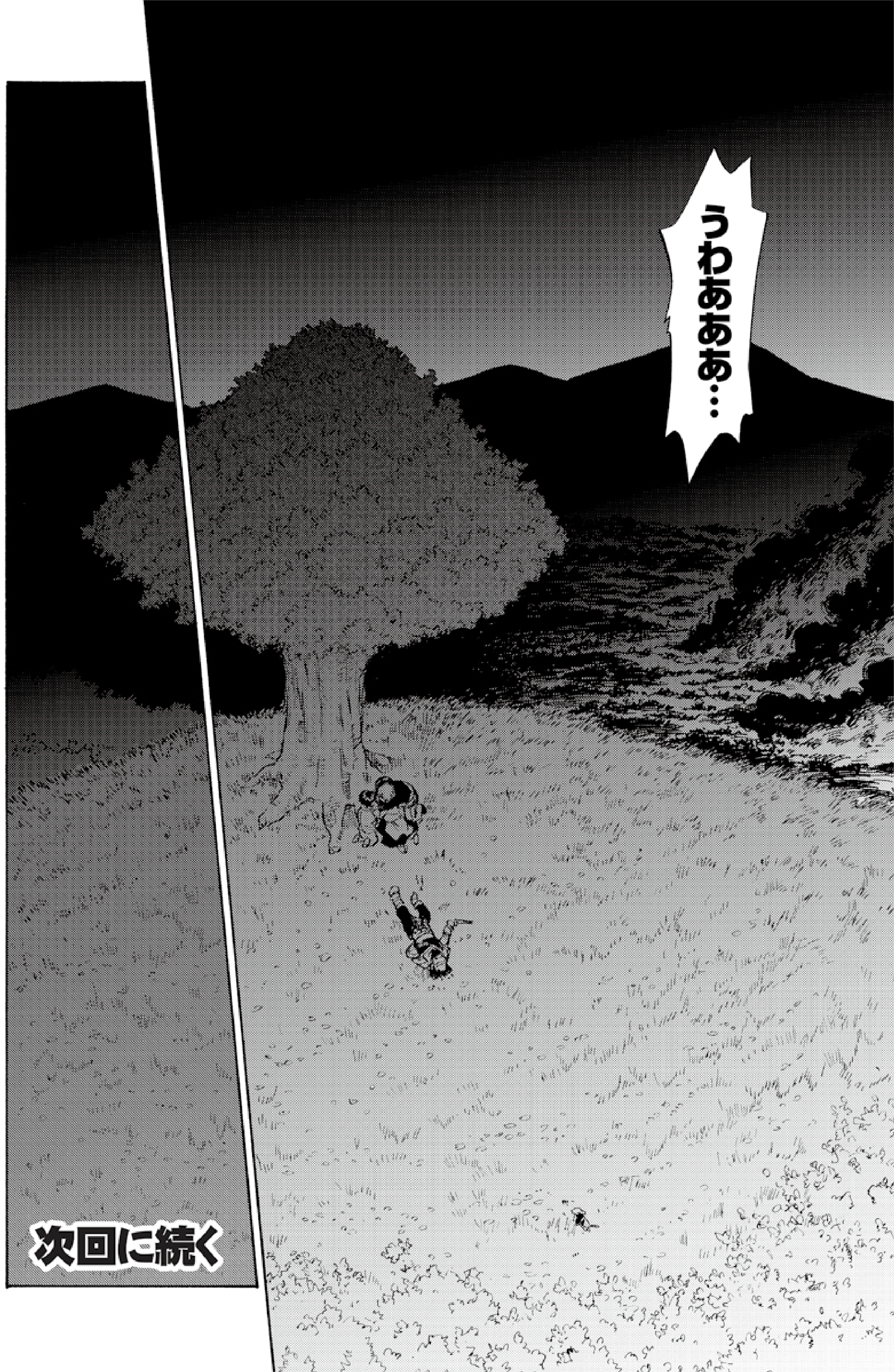


《剣帝》レオンハルトとともに現れた、古竜レグナートの暴走を抑えるために奮闘するエステルたち遊撃士一行。その頃、復讐者となったヨシュアはカプア一家の助力を受け、静かに結社《身喰らう蛇》へと迫りつつあった……。名作RPGのコミカライズ、迫真の第3巻！

著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム

定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3124-7

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル



今度の『空の軌跡』小説は
ナイアル&ドロシーが主役！



英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

シリーズ累計200万本を突破した、日本ファルコムの大人気RPG『軌跡』シリーズ。その中でも特に人気の高い『空の軌跡』シリーズから外伝小説が登場！ リベール通信社のナイアル&ドロシーの記者コンビが、リベール国内の取材旅行中に出遭った人たちとの触れ合いを描いていく、心温まるハートフルストーリー4篇を収録。

好評発売中!!

1,200円+税

判型：B6正寸　並製ページ数:296

ISBN：978-4-89610-846-0
発行元:フィールドワイ　発売元:メディアパル

FB ファルコムBOOKS

英雄伝説 零の軌跡

四つの運命

著者：田沢大典　イラスト：松竜

特務支援課は
ここから始まった!!



日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！

原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）

価格：1,155円(税込)

ISBN:978-489610-215-4

全国書店にて大好評発売中!!

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

■イース セルセタの樹海
～ the prologue ～

【登場人物】

アドル：梶裕貴
デュレン：平田広明
カーナ：石原夏織
アサド：掛川裕彦
レムノス：野島健児
バミー：日野由利加
リーザ：白鳥由里
カンリリカ：小倉唯
レオ団長：阪脩
サンチョ：石川英郎
パンサ：太田真一郎
グリゼルダ総督：金月真美
宿酒場の女将：大腰多佳子
キャスナン鉱員：荒井聡太
コモド住人（仮面の男）：中尾良平
ナレーション：中尾良平

○シーン1

○キャスナンの街／繁華街

SE：にぎやかな街の喧騒＋雨音

アドル「ここはどこだろう……？
僕は……？
僕は……誰なんだ……？」

○キャスナンの街／宿屋

SE：宿屋のBGM

宿酒場の女将「……まったく、珍しいこともあるものね。
ゴールドラッシュに沸く、この町で
まさか行き倒れるなんてねぇ」

アドル「はぁ……助かりました」

宿酒場の女将「まあ、鉱山から金が取れるおかげで、
ウチみたいな酒場も大繁盛してるし。
今日くらい寝る場所は何とかしてあげる
よ。
ゆっくりしていくんだね」

アドル「ありがとうございます。
あの……実は、僕、記憶が……なくて
……」

宿酒場の女将「あっはっはっ！
見かけによらず面白いお兄ちゃんだね。
悪いけど、そんなこと言っても、ウチで
アンタの
面倒は見られないよ」

デュレン「おい、アドル？ アドルじゃないか！」

アドル「え？」

デュレン「やれやれ、街へ戻ってきたなら、
このデュレン様に声をかけろって言った
ろ」

アドル「デュレン？ ……アドルって誰です
か？」

デュレン「あらら、何の冗談だ？ アドル……
アドル・クリスティン、お前さんの名前
だろ？」

アドル「アドル……それが、僕の名前か……」

デュレン「いやー、よく《セルセタの樹海》から
無事に戻ってきたな！
一歩踏み込んだら瞬く間に方角を失い、
脱出する術を失う魔の領域……
てっきり他の山師と同じように、のたれ
死んだと
思ってたが……」

アドル「僕は、そんな場所に行ってきたのか
……？」

デュレン「お前は、俺の金ヅルだ。
あ……いいや、もとい俺の心の友だ！
本当によく帰ってきた！」

アドル「あ、ああ……（汗）」

デュレン「で、早速だが商売の話だ。
知っての通り、このデュレン様は情報屋
だからな。
お前さんの持っている樹海の情報を買わ
せて
くれねぇか？」

アドル「うーん………すまない。やっぱり、
なにも覚えていない。
実は、僕には記憶がないんだ」

デュレン「…………は？
……今、何ておっしゃいました？」

アドル「僕には記憶がない。
自分の名前すら、今、デュレンから聞い
て
知ったくらいで。
その《セルセタの樹海》というのも、
まったく知らない。
なあ、どして僕は樹海に……？」

デュレン（小声）「……あらら、マジかよ。
一体、樹海で何があったってんだ？」

デュレン「いや……アドル、悪いが、
この話はなかったことにしようぜ。
邪魔したな……」

アドル「ちょっ……待ってくれ、デュレン」

デュレン「気を悪くしないでくれよ、アドル。
オレは直感でヤバいって感じた話には
関わらないことにしてるんだ」

SE：「してるんだ」のあたりに、かぶせてドアが激
しく開かれる。

鉱員　「……た、た、大変だぁっ！
　坑道に……坑道に《魔物》が出やがった!!」

デュレン　「何だと!?」

ＳＥ：ざわつく酒場の客たち。

宿酒場の女将「魔物だって!?　それで!?
　みんな、逃げられたのかい!?」

鉱員　「わからん……皆、自分が逃げるのに必死で……
　とにかく、誰でもいい！　助けてくれ！」

宿酒場の女将「なに言ってるの、こういう時のための
　ロムン軍でしょう!?
　レオ団長サマは一体なにしてるの!?」

鉱員　「そ、それが軍事演習とやらで
　今は留守にしてるらしくて……」

宿酒場の女将「こんな時に……!?
　本当に役立たずなヤツらだね！」

デュレン　「なんだかエライことになってるみたいだな……」

アドル　「酒場のお客さんたち、みんな助けに行くみたいだ」

デュレン　「アドル、俺も、ちょっくら行ってくるぜ」

アドル　「デュレンも、助けに行くのか？」

デュレン　「は？　騒動が起きたのに、情報屋が様子を
　見に行かねぇでどうすんだよ。それじゃあな！」

ＳＥ：静かになる。

アドルＭ　「……………
　うーん、よくわからないけど……
　みんな、困ってるみたいだな。
　よし、僕も行ってみよう。
　なにか手伝えることがあるかもしれない」

○シーン２

○キャスナンの街／坑道の前の広場

ＳＥ：焦燥感のある喧噪。

グリゼルダ総督「何をしているのか？
　怪我人はすぐに搬送なさい！」

グリゼルダ総督「鉱員の方たちは点呼を！
　まずは全員の安否を確認！」

デュレン　「ありゃりゃ、あの姉ちゃんは誰だい？」

鉱員　「あの指揮を執っている士官は、
　着任したばかりのグリゼルダ総督だ。
　今日は駐留軍のレオ団長が留守だから、
　総督が出張ってきたらしい」

デュレン　「はっはっ、なるほどなぁ……」

グリゼルダ総督「要救助者が３名残されているそうだ。
　すぐに突入の準備を！」

サンチョ　「え……で、でも……」

パンサ　「ボクたち、レオ団長の命令がないと
　……」

グリゼルダ総督「いいから早くなさい！
　《魔物》を倒す必要はない。
　鉱員たちの救助を優先しなさい！」

パンサ　「ね、ねぇ、サンチョ兄貴、
　団長と総督ってどっちがエライの？」

サンチョ　「バカ、総督に決まってるだろ」

グリゼルダ総督「さっさと行きなさい！」

サンチョ「ア、アイアイサー！」

パンサ「ア、アイアイサー！」
※２人の声を重ねます。

デュレン「あのグリゼルダ総督って姉ちゃん、レオ団長より、よっぽどしっかりしてるじゃないか」

鉱員「ああ。兵士たちは頼りないけどな……」

アドルM「うーん、来てみたものの……
あまり手伝えることはなさそうだな……
あれ？　兵士たちが坑道に入っていく。
まだ中に人が取り残されているのか。
大丈夫だろうか？」

アドル「ううぅ……」

アドルM「どうしたんだ、僕は……？
彼らを放っておけない……
このまま見過ごせない……
そんな気持ちが……」

○シーン３
○キャスナンの街／坑道の入り口

アドルM「彼らは……この奥に……」

デュレン「……おい、待て！」

アドル「え？　きみは……デュレンか？」

デュレン「ったく……フラフラと坑道に入ってくのが
見えたかと思えば……

お前さん、一体どこへ行くつもりだ？
アドル！」

アドル「うーん……放っておけなくて」

デュレン「はぁ……
お前さん……
もしかしてアレだろ、アレ」

アドル「アレ？」

デュレン「お人好し！
オレがこの世で一番嫌いな生き物だ。
お人好しなヤツほど周りを巻き添えにするからな。
……ったく、ほらよ！」

アドル「これは……剣（つるぎ）か？」

デュレン「ショートソードだ。
このままお前が野たれ死んだら、
オレの寝覚めが悪くなる。
せめてもの餞別だ。
だいたい丸腰で行くなんて……」

アドル「なるほど……これなら、
なんとなく、使えそうな気がするな」

デュレン「……って、記憶喪失ってことは、
もしかして戦い方も忘れてるとか!?」

アドル「自信はないけど、なんとかなるよ」

デュレン「真顔で言う台詞かよ!?
だーっ!!
こうなったら、ついていってやる！
途中までな！
いいか、途中までだぞ!?」

アドル「はは……お人好しは、デュレンのほうだな」

デュレン「う、うるせぇ、さっさと行くぞ！」

ナレーション「こうして、記憶を失っていながらも

人助けを買って出たアドルと、
お人好し嫌いのお人好しデュレンは、
魔物の潜む鉱山の奥へと向かうのだった」

○シーン4
○キャスナンの街／坑道

サンチョ「お、おい……
パンサ、大丈夫か？」

パンサ「いたた……サンチョ兄貴〜、
ボ、ボク、もうダメみたい」

サンチョ「弱音を吐くなよ。
あとでレオ団長にどやされるぞ」

パンサ「でも……こんなに魔物に囲まれちゃって
……」

サンチョ「ぐぐぐ……」

SE：魔物の咆哮

パンサ「ひぃぃっ……こ、こら！
あっちに行け、行けってば！」

デュレン「あ、おい、アドル！　やばいぞ！」

アドル「ああ！　今、助けます！」

サンチョ「おお！　パンサ、誰か来てくれたみたい
だぞ」

パンサ「お、おたすけ〜！」

アドル「はああぁっ!!」

SE：魔物の咆哮

SE：戦闘の効果音

デュレン「ふぅ……
あんまり、たいしたことはなかったな、
アドル」

アドル「そうだな、デュレン」

パンサ「ボク、あの世が見えた！　確実に見えた
よっ！」

サンチョ「お前はちょっと大げさなんだよ……
ところで、あんたたちは？」

デュレン「通りすがりのお人好しと、情報屋だ」

アドル「あの……その様子だと、いったん退いた
ほうが
いいんじゃないですか？」

パンサ「サンチョ兄貴ぃ、ボク足も痛いし、
お言葉に甘えてそうしようよ〜。
やっぱり、ボクには兵士なんて向いてな
かったんだ」

サンチョ「う〜ん……こいつがこんな調子じゃ、
確かにそうしたほうがよさそうだな。
あんたたちも、あまり無理しないでくれ」

アドル「はい、ありがとうございます」

パンサ「そ、それじゃあね〜！」

○シーン5
○キャスナンの街／坑道の奥

デュレン「う〜ん……ここは……
周りの様子が変わったな。
どうやら、古い遺跡につながったようだ
が……」

アドル「鉱山の奥が、遺跡に？」

デュレン「そういうことがあるらしいぞ」

ＳＥ：ボス魔物の咆哮

アドル「デュレン、危ない！」

デュレン「うおっ!?　出やがった……」

アドル「なんとなく、感じる……強そうだ……」

デュレン「こいつが騒ぎの犯人か!?」

ＳＥ：ボス魔物の咆哮

アドル「戦うしかないみたいだな」

デュレン「アドル、来るぜ！」

戦闘ボイス（ＳＥやかけ声などを合わせて）

ＳＥ：ボス魔物の断末魔

デュレン「ひゅう、何とかなるもんだ」

アドル「ああ、よかった」

デュレン「それにしても、アドル……なかなか大した腕前じゃないか。記憶を失ったとはいえ、さすが樹海で生き延びただけあるな」

アドル「自分でも驚いたよ」

デュレン「お前な……そんな状態で、よくここに飛び込む気になったよな。勘弁してくれ、むちゃくちゃだぜ……」

アドル「そうしなければいけない気がしたんだ」

デュレン「お前さんみたいに、お人好しで無鉄砲なヤツは長生きしねぇぞ」

ナレーション「鉱山の奥で魔物を倒し、取り残されていた人たちや、傷ついた兵士たちを助けたアドルとデュレンは、外に出るなり、大勢の歓声を受けた」

○シーン６

○キャスナンの街／坑道の入り口

ＳＥ：歓声

デュレン「な、なんだなんだ？　お祭りか？」

鉱員「いや〜、よくやった！　仲間を助けてくれて、ありがとよ！」

アドル「いえ、そんな……」

グリゼルダ総督「ご苦労だったな。貴殿が報告にあった赤毛の若者か……私はセルセタ総督のグリゼルダだ。以後、お見知りおきを願おう。貴殿の名は？」

アドル「アドル・クリスティンです」

グリゼルダ総督「アドル……優しさと勇ましさを兼ね備えた良き名だ」

アドル「あの……この騒ぎは？」

グリゼルダ総督「皆、鉱山長たちを助けてくれた貴殿らの帰りを待っていたようだ」

アドル「みんなが、僕たちを……!?」

グリゼルダ総督「さて、まずは鉱員たちと、わが軍の兵士を助けてくれて礼を言おう。是非、貴殿らとは、ゆっくりと話をしたいものだが……」

ＳＥ：歓声

グリゼルダ総督「これ以上、騒ぎを大きくするわけにはいかぬ。二人とも総督府まで来てもらえぬか？」

SE：歓声をフェードアウト

○シーン7

○セルセタ総督府／総督の私室

グリゼルダ総督「――それにしても、面白い偶然も
あったものだ。
東のエステリアという地方に長年、嵐に
囲まれた
謎の島があったのだが……
そこを解放した人物も赤毛の若者だった
と
いうではないか」

デュレン「そういえば、少し前に、宿酒場でも
そんな情報があったな。
アドルも赤毛だよな……」

アドル「そうだけど……
何度も言うようだけど、僕はなにも覚え
てないんだよ、
デュレン」

デュレン「そうだよな。
……まあ、まさかな」

グリゼルダ総督「とにかく、アドル。デュレン。
貴殿たちには改めて礼を言おう。
そして、それとは別件になるのだが、
もう一つ聞いてほしい話があってな……」

アドル「なんですか？」

グリゼルダ総督「ここから北西に広がっている
《セルセタの樹海》を知っているか？」

アドル「うーん……
知っているような知らないような……」

グリゼルダ総督「何だ、どちらなのだ？」

デュレン（小声）「アドル、話がややこしくなるから、
知らないことにしておけ」

アドル（小声）「そうだね」

グリゼルダ総督「まぁ、いい……
《セルセタの樹海》に、ひとたび足を踏み
入れれば、
たちまち方角を見失うと言われている。
凶悪な獣も数多く生息しており、
生還できる者がほとんどいない場所だ
……
故に我が軍も、その開拓には二の足を踏
んできた。
しかし、本国から新たな鉱脈を発見せよ
という
命令があってな」

デュレン（小声）「軍人ってのも、意外と大変だな」

アドル（小声）「そうみたいだな……」

グリゼルダ総督「そこでだ！ アドル・クリスティン、
貴殿の腕前を見込んで頼みたい。
《セルセタの樹海》の地図を作っては
もらえまいか？」

アドル「地図ですか？」

グリゼルダ総督「ああ。誰も踏み込めない場所だけに、
未だ樹海の地図というものは存在しない。
隅々まで探索して、地図を作成してほし
いのだ」

デュレン「おいおい、たしかに、地図がありゃ、
迷うこともないだろうけど、
生きて帰れないって言われてる場所だ
ぜ!?」

グリゼルダ総督「もちろん命がけになる分、
相応の見返りを用意するつもりだ。
明日、正式な告示を行うが、地図を完成
して収めた者には高額な褒賞金を与えた

いと思う」
デュレン「高額って……
一体どれくらいになるんだ?」
グリゼルダ総督「区域ごとに分けるつもりだが、
合計で3000万ゴールドの予定だ」
デュレン「ヒュー……
そいつぁスゲーな」
アドル「うーん……
ちょっと考えさせてもらっていいです
か?」
デュレン「たしかに、ヤバイ感じはするよな」
グリゼルダ総督「うむ……
危険があるのは間違いあるまい。
よく考えて……明日にでも返事を聞かせ
てほしい」
アドル「わかりました」
デュレン「じゃあ、俺たちは、このへんで」
グリゼルダ総督「ああ……ご苦労だった」
アドル「失礼します」
SE:ドアを閉める

○シーン8
○セルセタ総督府/廊下

デュレン「ふぅ〜地図か……
樹海はヤバイよなあ……
でも、3000万ゴールドかぁ〜」
アドル「ん? 誰だろう、あのヒゲの大男は?」
デュレン「え? あれは……」
レオ「ぬぬ〜〜?
もしかすると貴様は鉱山で《魔物》を倒
したという赤毛の剣士ではないか?」
アドル「たぶん、そうです」
レオ「フン、やはりそうか……
なぜ分かったか知りたいか?
それはオレ様が天才だからだ」
デュレン(小声)「おい、自分のこと俺様だってよ
……」
アドル(小声)「それ、デュレンも言ってたよ
……?」
レオ「オレ様の名は、レオ!
セルセタ駐留軍の団長だ。
オレ様が留守の間にちょっと活躍したか
らって　いい気になるなよ。
オレ様がいれば、お前なんかより迅速か
つ芸術的に　解決してたに違いない
のだ。
わーはっはっはっ!
わーはっはっはっはっ!
わーはっはっはっ!」
※笑いながら遠ざかっていく。
デュレン「笑いながら行っちまったぞ……?」
アドル「変わった人だったな」
デュレン「……あれがある意味、キャスナンいち有
名な
レオ団長だ。
アドル、お前さんといると、濃いヤツば
かりに
絡まれるなぁ」
アドル「はは……デュレンもね」
デュレン「まぁ、いい……酒場に戻ろうぜ。
あそこの二階に泊まってるんだろ?」
アドル「ああ、寝る場所は何とかしてくれるって
言ってたな」

○シーン9

○キャスナンの街／宿屋

ＳＥ：宿屋のＢＧＭ

デュレン「あー、この世に生まれて以来、一番長い一日だった気がするぜ……」

アドル「たしかに、疲れたな」

デュレン「それで、アドル……総督の頼みごとは、結局、どうするつもりなんだ?」

アドル「まだ決めていないけど?」

デュレン「何だ、悩んでるのか? まあ、お前さんはロムン軍のヤツらと相性いいとは思えないが……」

デュレン「……………………………………アドル……一つ提案させてもらっていいか?」

アドル「なんだい、デュレン?」

デュレン「お前さん、俺と組んで地図作りを引き受けてみないか?」

アドル「え? デュレンと二人で?」

デュレン「そう意外そうな顔をするな。情報屋が地図を売るのは、おかしくねぇだろ?」

アドル「ひょっとして、褒賞金が目当て?」

デュレン「はは! さすがにバレるか。だが、そうだとしても、お前さんにとっちゃ悪い話じゃないと思うぜ?」

アドル「どうしてだ?」

デュレン「俺は一儲けしたい。アドルは記憶を取り戻したい。そうだろ?」

アドル「ああ」

デュレン「お前は樹海に行って記憶を失った。だとすれば、取り戻すには、もう一度樹海に行くしかないんじゃないか?」

アドル「ふむ……なるほど……」

デュレン「そのついでに地図を作れば、ロムン軍に売れる」

アドル「たしかに、悪い話じゃなさそうだ」

デュレン「ふふん、商談成立だな」

アドル「上手く乗せられている気もするけどね」

デュレン「いいじゃねぇか。この際だ、乗せられとけよ! アドル」

アドル「はは……わかったよ、デュレン」

アドルＭ「《セルセタの樹海》か……そこで、いったい何があって、僕は記憶を失ったんだろう?」

ナレーション「翌朝……総督府を訪れたアドルとデュレンは、グリゼルダ総督に、地図作りを引き受けると伝える。そして、樹海探索へと旅立つのだった。」

○シーン10

○コモド

デュレン「はー、こいつは……スゲェな……でっかい樹の上に村がありやがる……」

アドル「ああ……本当に大きな木だ」

デュレン「アドル、以前に、ここへ来た覚えはないのか?」

アドル「うーん……

何となく覚えがあるような……」

デュレン「そうか。もし来てるなら、知り合いがいるだろうから、話が早いんだがな……」

アドル「うん。とにかく行ってみるとしよう」

デュレン「おう、鬼が出るか蛇が出るか……」

○コモド／門

デュレン「おっ、門番みたいのがいるぞ。こんちゃ～っす！」

アドル「こんにちは」

コモド住人「ん？　なっ⁉　貴様は……‼　この前やってきた、赤毛の異邦人ではないか！」

デュレン「何だ、やっぱりお前さん、ここへ来たことあるみたいだな、アドル」

アドル「ああ、そうらしい」

デュレン「知り合いなら、ちょうどいい。わりぃけど、中へ案内してもらえないか？」

コモド住人「バカな！　何の冗談だ⁉　よくもそのような口を利けるものだ。貴様が森の神の怒りに触れたというのに！」

デュレン「な、何だぁ⁉　ずいぶん、お怒りのようだが……」

デュレン（小声）「おい、アドル。お前さん、何かやったワケ？」

アドル（小声）「うーん……覚えてないが……」

コモド住人「森の戦士の名に懸けて、今、この場で始末してくれる！」

SE：剣を抜く音。

デュレン「ちょ、ちょっと待ってくれ……こっちの話も聞いてくれや！　こいつは、ここに来たこととか、自分のことを何も覚えちゃいないんだ！　だから、記憶を取り戻したくて、ここへ来たんだよ‼」

コモド住人「覚えていない、だと……そんな言い訳が通用するはずないだろ‼　バカにしているのか⁉」

デュレン「う……火に油を注いじまったみたいだ」

アドル「デュレン、さがってくれ。どうやら、僕は恨みを買ってるみたいだ……」

デュレン「おい、アドル⁉」

コモド住人「いくぞ、赤毛の異邦人！」

カーナ「やめなさい！」

コモド住人「カ、カーナ……？」

カーナ「……記憶を失った？　あたしが知ってるアドルは、そんな都合のいいウソをつく人間ではなかった。アドル、あたしのことも忘れてるっていうの⁉」

アドル「えっと……君は……」

カーナ「……あたしと初めて会った時のこと……覚えてないの？」

アドル「……すまない」

カーナ「アドル、あなた……あたしが獣と間違って狩りそうになった時にも謝ったわ。紛らわしくてごめん、って」

アドル「そうなのか？」

デュレン「そいつは、いかにもアドルらしいな」

カーナ「ふふ……記憶がないと言っても、やっぱり、アドルね。その目……曇りがないというか、バカに素直というか……相変わらず、樹海を行き来できる屈強な剣士には見えないわね」

コモド住人「カーナ、お前……こいつらの言うことを信じるのか？」

カーナ「んー……今は何とも言えない。ただ、どっちにしても彼らの話を聞く必要があるわ」

コモド住人「この時期に集落に入れるのか!?」

カーナ「みんなが焦っている気持ちは、とてもよく分かる。あたしの家も同じだから……」

コモド住人「あ……そ、そうか、お前のところも……」

カーナ「でも、大変な時だからこそ、心を静めてどっしり構えましょう。コモドを守ってくれている、この大樹のようにね。そうでないと大切な判断をすることは出来ないわ」

コモド住人「そうだな、すまない……」

カーナ「中へ案内するわ、アドル……それと……？」

デュレン「俺はデュレン。よろしく頼むぜ」

カーナ「私は、カーナよ」

SE：木の門が開く音。

○シーン11
○コモド／部屋

カーナ「紹介するね。こちら、あたしのお父さん。」

アサド「……アサドだ。この集落の長を務めている。アドル、お前とは一度、会っているのだがな……カーナから聞いたのだが、記憶を失ったそうではないか？」

アドル「少しずつ思い出してるとは思うんですが……」

アサド「ふむ……願わくは、お前が知っていたことを教えてほしかったのだが……」

アドル「すみません……僕は、いつここへ来たんでしょうか？」

アサド「2週間ほど前だ……樹海の外から人が訪れるとは前代未聞の出来事だったのだが……今、この集落には、その時以上の騒ぎが起きている」

アドル「騒ぎ、ですか？」

カーナ「今、この集落では《神隠し》が起きてるの」

デュレン「……《神隠し》？」

カーナ「住人が、ある日、こつ然と姿を消してしまって、どこへ行ったのか分からない……続いて一人、また一人と消えて、誰一人として戻ってこないの」

アサド「最初の事件が起きたのは、アドルが、このコモドを去った直後だ」

デュレン「なるほど……そりゃあ、アドルが真っ先に犯人扱いさ

れるワケだ」

アドル「たしかに……」

アサド「アドルは集落が始まって以来、
初めての来訪者だったのだ……
お前が去った後に異変が起きれば、
当然、疑う者が出てくる。
あの赤毛の異邦人が森の神を怒らせたのだ、
と言ってな」

デュレン「そりゃあ、無理もない話だぜ」

カーナ「今、住人たちは交代で寝ずの番を続けながら　警戒してるの。だから、苛立っている人も多くて……」

アドル「なるほど……
わかりました。
僕は犯人を突き止めようと思います」

カーナ「えっ!?
それは……
たしかに、犯人が見つかれば、アドルへの疑いは
晴れるし、あたしたちもうれしいけど
……」

アサド「何となく、お前なら、そう言いそうな気がしていた。
だが俺の立場から言わせてもらえば、
もうしばらくはここにいてくれ」

アドル「なるほど……」

デュレン「しばらくって、いつまでだ？」

アサド「明け方には森の捜索が終わる」

デュレン「朝まで何も分からなければ、どうなるんだ？」

アサド「その時、考えさせてもらう。
明日の朝まで、この部屋にいてくれ……
カーナ、行くぞ」

カーナ「あ、う、うん……
アドル、あとで食事は持ってくるからね」

アサド「そういえば、アドルよ……
あいつの……
レムノスのことも覚えていないのか？」

カーナ「お父さん……!!」

アドル「レムノス……ですか？
うーん……」

アサド「やはり、覚えていないか……
もし、何か思い出したなら、声をかけてくれ」

SE：扉が閉まる音。

ナレーション「アサドやカーナは友好的だったが、
集落の住人たちはアドルとデュレンを神隠しの犯人ではないかと強く疑っていた。
結局、アドルたちは縄で縛られてしまうのだった」

デュレン「やれやれ、すっかり犯人扱いだな」

アドル「いや。まだわからないと思っているからこそ、逃げないように縛ったんだろう。
アサドさんや、カーナが説明してくれたおかげだ」

デュレン「たしかに、門番の男は剣を抜いてたもんな。
あのカーナってのが、とめてくれなかったら　どうなっていたやら……」

アドル「俺たちが神隠しの犯人じゃないとわかれば、この縄だって解いてくれるさ」

デュレン「ふぅ〜……
逆に言えば、朝までに何もわからなければ、
アドルが犯人ってワケかよ……」

アドル「そういうことになるのか？」

デュレン「この手の事件に決着をつけるには、犯人が必要だからなぁ」

アドル「なるほど」

デュレン「落ち着いてるじゃねえか。やってもいないことの犯人にされていいのかよ!?」

アドル「たしかに、集落の人たちを連れ去ったなんて覚えはないけど……
やってないって記憶もないからな……」

デュレン「ああ……そういうことか……はぁ〜。そういや、最後に聞かれたレムノスってのは何なんだ？　人の名前か？」

アドル「う〜ん……
すこし前に、竪琴を引く青年を夢で見たんだ……
そのことを、今、ふと思い出した」

デュレン「そいつが、ここの人間かもしれないんだな？」

アドル「何かきっかけがあれば、もっと思い出せるかもしれない……
いずれにしても、ここで待っているだけでは、
事件を解決できないと思う」

デュレン「同感だ。なんせ、２週間前から起きてる事件なのに、ここの住人は、犯人の目星もつけられてないんだ。
明日の朝までに都合よく何か発見できるとは思えないぜ。
…………逃げるか、アドル？」

アドル「いや……
でも、情報は集めたい」

デュレン「よし。少し待ってろ……
こんな縄くらい、どうにでもなる。
武器も道具もそのままだしな」

アドル「うん……
あのアサドという人は、俺たちのことを縄で縛ったり、
ここで待ってるように言ったけど……
それは集落の住人たちを安心させるためで、本当は
もしかしたら……」

デュレン「どうだろうな？　おしっ、ほどけたぜ」

アドル「もう縄を抜けられたのか？　たいしたもんだ……」

デュレン「危ない橋は渡らない主義だが……
情報屋をやっていれば、こういうのが必要な時もあるからな」

○シーン12

○コモド／回想

ナレーション「大樹のうえに広がる集落――
アドルとデュレンは、そのコモドのなかを人目を避けつつ探索した。
その結果、アドルはわずかに記憶を取り戻す。
初めて、この集落を訪れた２週間前のことを　思い出すのだった」

レムノス「君の名前は、アドルというのか。
オレはレムノス。

イース セルセタの樹海
～the prologue～

姉のカーナがいきなりナイフを投げたりして……失礼なことして、すまなかった」

アドル「いや、まぎらわしかった僕も悪かったと思う」

レムノス「そう言ってもらえると……まったく、動くものを見たら咄嗟に攻撃するなんて、どっちが獣か分かんないよな」

カーナ「わ、悪かったわよ……いきなり狩ろうとして」

アサド「一歩樹海に立ち入れば、そこは獣たちがひしめく弱肉強食の世界……カーナのように神経を研ぎ澄ませなければ生き抜けまい。もっとも、剣一本で樹海を抜けてきたアドルには、無用の説法だと思うがな」

カーナ「そうそう、頼りなさそうに見えて、剣の腕はかなりのものよ？　ねえ、アドル、今度は正々堂々と勝負してみましょう！」

アドル「いや……それは……」

レムノス「姉貴……お客さん、引いてるよ？」

カーナ「え、な、なんで!?」

アサド「アドル……こいつらは双子の姉弟でな。カーナは男衆以上に狩りや戦いの技に秀でている。レムノスのほうは手先が器用で、楽器の演奏や細工物が得意だ。このコモドを案内するのに、二人ならうってつけだろう」

アドル「ありがとうございます」

アサド「何、礼には及ばん……それでは二人とも、よろしく頼むぞ」

カーナ「分かりました、父さん！」

レムノス「どもども、よろしく」

カーナ「こっちに来て、アドル！　早く、早く！」

ナレーション「初めてコモドを訪れたアドルは、カーナとレムノスに集落を案内してもらった。樹海を彷徨った疲労を忘れるほど充実した日々は、瞬く間に過ぎていくのであった」

SE：竪琴の演奏。

レムノス「……この曲は昔、樹海にあったっていう幻の王国を偲（しの）んで作られたらしい」

アドル「いい曲だな。それに、演奏もよかったよ、レムノス」

レムノス「ありがとう。竪琴は得意なんだ。それにしても……もう出発しちまうなんて、アドルはせっかちだな」

アドル「他にも見てみたい場所があるからね」

レムノス「あいにく、親父と姉貴は、毎日、この時間は狩りに出てるな」

アドル「そうなのか。僕も暗くなる前に進んでおきたいし、仕方ないな……また来ると思うから、気にしないでくれ」

レムノス「ああ、親父と姉貴には、しっかり伝えておくからよ」

アドル「そういえば、レムノスは狩りに出ないのか？」

レムノス「オレが狩りに？

はは……ケガでもしたら、竪琴が弾けな
くなっちまうよ」

SE：草木の揺れる音。ガサガサ！

レムノス「──ん？」

アドル「どうした、レムノス？」

レムノス「誰だ、アレ？　仮面をつけた男が……
あっ……!?」

SE：草木の揺れる音。ガサガサ！

アドル「森の奥に走っていったな。
ずいぶん、素早かったけど」

レムノス「ああ、誰だろう……？」

アドル「狩りをしている人じゃないのか？」

レムノス「いや、そんなはずはない……
狩場になっている森は、この辺りじゃ
ないはずだ……」

アドル「レムノスの知り合い？」

レムノス「集落の人間には間違いないと思うが……
でも、あれは……
あの妙な仮面は、いったい……？」

ナレーション「断片的にだが、記憶を取り戻したアドル。
仮面の男が消えた森を見つめるレムノス
の顔が、
とくに鮮明に思い出されたのだった」

○シーン13

○コモド／探索

アドル「ううぅ……」

デュレン「おい、アドル……大丈夫か？」

アドル「ああ……」

デュレン「どうやら、何か思い出したようだな？」

アドル「ああ……
初めて、このコモドに来たときのことを
ね。
僕はレムノスと会っていたみたいだ……
あと、すこし気になることも……」

カーナ「あー!!
アドル、見つけたわよ！」

アドル「あっ、カーナだ」

デュレン「げげっ、見つかっちまったか」

カーナ「ちゃんと縄で縛っておいたのに、どう
やって　ほどいたの!?」

デュレン「いや、それは……」

カーナ「今度あたしにも教えてよね！」

デュレン「おいおい……」

アドル「すまない、カーナ……
やっぱり、僕も事件について調べたくて。
レムノスが見た仮面の男……
何か関係があるのかもしれない」

カーナ「えっ!?
アドル、もしかして、記憶が戻ったの!?」

アドル「うん、全部ではないけど……」

アサド「仮面……だと？
詳しく聞かせてもらおうか、アドル」

カーナ「あっ、お父さん」

アドル「さっき思い出したところなんですが……
レムノスが、妙な仮面の男を見つけたん
です。
コモドの住人だと言っていました」

アサド「ふむ……
魔除けとして仮面を部屋の中に飾る
風習はあるが……」

アドル「いえ……そうした仮面と同じならレムノ

スは
妙な仮面とは言わないと思うんです」

アサド　「なるほど」

カーナ　「ん～……妙な仮面、ねぇ？」

デュレン　「よし、ここは手っ取り早く、本人に話を
聞いてみるとしようや。なあ？」

アドル　「そうだね」

アサド　「む…………」

デュレン　「……どうした？」

カーナ　「レムノスは、ここにはいないわ」

デュレン　「何だ、どこかに出かけてるのか？」

カーナ　「いえ、集落から姿を消したのよ。
アドルを見送った、その日のうちに……」

アドル　「何だって⁉
レムノスも《神隠し》に遭ったっていう
のか……⁉」

アサド　「……アドル、教えてくれたことについて
は感謝する。
だが、お前の話を丸ごと信じていいもの
かどうか
……」

アドル　「そうですね……」

SE：外から剣撃の音と怒号が聞こえてくる。

デュレン　「おい、何の騒ぎだ⁉」

カーナ　「父さん、この音は……⁉」

アサド　「カーナ、行くぞ！」

カーナ　「はい！」

SE：アサドとカーナの駆け足

デュレン　「一体、何があったっていうんだ？」

アドル　「様子を見に行こう、デュレン！」

デュレン　「はいはい、今回ばかりは賛成だぜ」

○シーン14

○コモド／外・襲撃

SE：剣撃の音がさらにクリアに聞こえてくる。

アドル　「あれは！」

デュレン　「カーナたちと睨み合ってる連中、
仮面をかぶってるぞ」

アドル　「あの仮面は……」

カーナ　「あなたたち……
これは一体何の真似なの⁉」

仮面の男　「ふぅ、ふぅ…………ふおっ‼」

アサド　「下がれ、カーナ‼」

SE：剣を剣ではじく音。

カーナ　「父さん‼」

SE：剣の斬り合い、3回ぶんくらい。

仮面の男　「ふん！　ふん！」

アサド　「ぬ……強い……⁉」

カーナ　「そんな、あの父さんと互角に渡り合うな
んて……⁉」

アサド　「おおおぉぉぉ、せいっ‼」

SE：エフェクトまじりの剣戟音。

アサド　「皆は下がっていろ……‼
こいつらの力、尋常ではない！」

カーナ　「う、うん！」

デュレン「おお、やるな。押し戻したぜ！」

アドル「あの仮面の男から感じられるオーラは
いったい……？」

デュレン「アドル、もしかして
お前さんとレムノスが見たっていう……」

アドル「うん。そうだと思う」

デュレン「やはりか……しかし……
一体何が起きていやがる？」

アドル「あの人たちは、格好からして、コモドの
住人だ。
どうして、自分たちの集落を襲撃するん
だ？」

デュレン「ん？ あらら、アドル……
連中、増援がいるみたいだぜ！」

アドル「ああ……
まずいな、アサドさんが囲まれた」

アサド「お前たち……
姿をくらませていた連中なのか？
一体なぜ……」

レムノス「ふぅ…………………………」

※無言のままオーラをまとうレムノス（仮面）。
力を込める感じの呼吸で。

デュレン「おい、あの仮面の男……
ひときわ、すごそうだぜ」

アドル「ああ、すごいオーラだ」

アサド「……答えられぬか。
いずれにしても、この集落の者を傷つけ
た以上……」

SE：剣の音。

アサド「……狩らせてもらうぞ！」

アサド「ずあっ！」

レムノス「ふんっ！」

SE：剣を振る。

SE：剣をはじく。

アサド「ぬっ!? お前は……!?」

カーナ「父さん!? 大丈夫なの!?」

アドル「行こう、デュレン！
どうやら、見ている場合じゃなさそう
だ！」

デュレン「仕方ねぇな……
おい、おっさん！ 助太刀するぜ!!」

カーナ「アドル、デュレン……!!」

アサド「ぬっ……お前たち、手出しは無用だ」

アドル「しかし、アサドさん……」

デュレン「勝てるのかよ!?」

アサド「いいから、下がっていろ。
これは……この集落の問題だ。
そして、こやつは……
こやつだけは……俺が……
ぬああぁぁぁ〜〜〜!!」

レムノス「おおおぉぉぉ〜〜〜!!」

SE：何度かの斬り合い。

アサド「ぐあっ……!!」

カーナ「っ…………父さん！」

アドル「あっ！ 仮面の男たちが！」

デュレン「くそっ……逃げやがったか。

追いかけるか、アドル⁉」

アドル「いや。あの身のこなしは、かなりこの森に慣れてる。僕たちでは追いつけないよ」

デュレン「なるほど……しょうがねぇな」

ナレーション「その後、カーナは集落の負傷者たちを手当し……
アドルたちは周辺の見回りをしたが、仮面の男たちが再び襲ってくることはなかった。
深手を負わされてしまったアサドの治療は夜を徹して行われた……」

カーナ「父さんはコモドの戦士として、集落では間違いなく最強なのよ。
その父さんをあの仮面の男は明らかに上回っていたわ。
そんなに腕が立つ人なんて……」

デュレン「……消えたヤツの中には、いないってワケか」

アドル「彼らの目的はなんだろう？
アサドさんに手傷を負わせたあと、姿を消して、それっきりだなんて」

カーナ「それこそ、あたしたちにはワケがわからないわ……
同じ集落の仲間のはずなのに……」

アサド「カーナ……あの仮面の男に……
……手を出すな……」

○シーン15
○コモド／アサドの寝室

アサド「うっ…………」

カーナ「父さん……！」

アサド「カーナ……ここは……？」

カーナ「安心して、あたしたちの家よ」

アサド「そう……か……すまないな……」

アドル「……アサドさん、気がついてよかった」

アサド「アドル……」

カーナ「父さん、神隠しはアドルたちと関係ないわ。

アサド「うむ……わかっておる……
だから……」

デュレン「なあ、あの仮面の奴らは、やっぱ《神隠し》に遭った連中なのか？」

カーナ「多分……」

デュレン「多分？　違う可能性もあるってのか？」

カーナ「え……
ど、どうして、父さん？」

アサド「……俺の傷が……癒えるまで……
あれは……あの男は……
…………………………」

カーナ「……父さん⁉」

アドル「カーナ、大丈夫だよ、眠っただけだ」

カーナ「う、うん……」

デュレン「体力が回復するには、まだ時間が必要なんだろ」

カーナ「父さんは何を言おうとしたのかしら
……」

アドル「戦ったときに、なにか気づいたことがあったのかもしれない」

カーナ「そうね……
目が覚めるのを待って、聞くしかないわね」

デュレン「さて、アドルよ……俺たちはどうするのかね？」

アドル「アサドの治療をしているとき、森の捜索に行った人たちに話を聞いてみたんだ」

デュレン「お前さん、姿が見えないと思ったら、そんなことしてたのか」

アドル「仮面をつけた男を、この集落より樹海の奥にある《千古の巣穴》という場所で見かけたらしい」

カーナ「《千古の巣穴》!?　そんなところに……」

デュレン「ふう……やっぱり、まだ関わる気かよ」

アドル「ああ、すべてを覚えているわけではないけど、前に来たとき、カーナやレムノスには集落を案内してもらったり、アサドさんにはよくしてもらったんだ。放っておけない」

デュレン「やれやれ、仕方ねえな」

カーナ「あたし、行ってみる！」

アドル「カーナ……!?　まさか《千古の巣穴》に？でも、君は、お父さんが……」

カーナ「あとは安静にしてるしかないわ。あたしは仮面のヤツらを調べようと思う。待ってるだけなんて……やっぱ性に合わないのよね」

アドル「そうだとしても、危険だ」

カーナ「あたしたちの中で一番強い父さんが負けちゃったのよ？ってことは今度襲撃を受けたら、あたしたちにはもう防ぎようがない。だったら、仮面の男たちの居場所へ行って、先に対処の手がかりだけも」

アドル「うーん……カーナの言うことは、もっともだけど」

カーナ「どうするか決められないまま、時を過ごすのは苦手……例え間違ってもいいから、あたしは行動することを選ぶわ」

アドル「ふぅ……わかったよ。たしかに、樹海の道案内は欲しかったし」

カーナ「フフ、ありがと」

デュレン「何と言うか、まあ……大したお嬢ちゃんだぜ……」

ナレーション「アドル、デュレン、カーナの3人は、樹海の深くにある《千古の巣穴》へとたどり着く。そこは、仮面をつけた者たちの隠れ家になっていた。やはり、彼らはコモド集落の住人であり、どうやら仮面に操られているだけらしかった。アドルたちは、集落の人々を助けつつ、先へと進むのだった」

○シーン16

○千古の巣穴／レムノス戦

SE：竪琴の曲

デュレン「おい、アドル……奥から、なにか聞こえないか？」

アドル「ああ……これは、竪琴の音……？しかも、聞き覚えのある曲だ」

カーナ「っ!!
……あたしは小さい頃から
この曲を聞いて育ってきた……
間違いない。
この音色……レムノスの竪琴だわ！」
アドル「ああ、そうだと思う。急ごう！」
カーナ「うん！
レムノス……今行くわ」

SE：足音

アドル「っ!? 仮面の男が、竪琴を……!?」
カーナ「これは……どういうこと？」
デュレン「あいつは、集落を襲撃して、カーナの
親父さんを斬ったヤツじゃねぇか！」
カーナ「そんな……
父さんを傷つけたのはあなたなの……？
――レムノス!!」

レムノス「ふぅ…………………!!」

SE：オーラをまとう。

アドル「また、オーラが全身をつつみこんで……
アサドさんがやられたときと同じだ」
デュレン「フン……やる気かよ？」
アドル「下がるんだ、カーナ！」
カーナ「アドル……
あれは、レムノスなの！」
アドル「ああ、でも今は操られてる。
ここにいた他の人たちと同じだ！」
レムノス「おおおぉぉぉ……!!」
デュレン「来るぞ、アドル！ カーナ！」
カーナ「くっ……
レムノスなのに！」
アドル「今は、戦うしかない！」

SE：バトルの効果音

○シーン17
○千古の巣穴／バミー戦

デュレン「ハァハァ……何とかなったか……
だが、こいつは他のヤツと比べると
別格の強さだったぜ……」
アドル「ああ……
レムノスは剣なんて苦手だったはずだけ
ど……
とにかく、仮面を外そう」
カーナ「あたしがやるわ……」
アドル「っ!? カーナ、待つんだ！
なにか、光って……」

SE：転送魔法の効果音

バミー「ウフフ……」
アドル「なにもないところに、急に人が現れ
た!?」
カーナ「ど、どういうことなの!?」
デュレン「また妙なヤツが出てきたぞ？
転移魔法ってやつか……
こいつも、コモドの住人……ってことはな
さそうだな。
見るからに」
バミー「実験は成功ね……
仮面の力は十分に分かったわ」
カーナ「……あなた、誰なの!?」
バミー「誰？ あなたたちに答える筋合いは
ないのだけれど……」

まあ、いいわ……
今日の私はすこぶる機嫌がいいの。
私の名前はバミー……
心の闇をついて人を操る《魔道師》よ」

アドル　「魔道師……人を操るだって……？
それが、仮面の力なのか？」

魔道師バミー「そう女性を急かすものではないわ。
彼を操っているのは仮面ではなく、
私の魔法よ……ホラ、このように……」

SE：指パチン

アドル　「レムノスの身体から、オーラが消えた⁉」

レムノス「ふぅ……」

SE：どさり

デュレン「おい、倒れたぞ⁉」

カーナ　「レムノス‼」

アドル　「操ってるのが、お前の力なら、この仮面は一体何なんだ……？」

バミー　「この仮面は、さるお方から預かって、実験していたものよ。
どうやら、あらゆる人間の能力を飛躍的に高める力を持っているようね」

デュレン「そ、そんな仮面が……⁉」

アドル　「なるほど。戦士でもないレムノスが、あれだけ強かったのは、そのせいだったのか。……でも、おかしいな？」

デュレン「なにが、おかしいんだ、アドル？」

アドル　「ここの入り口のところでも、仮面の男たちと戦っただろ？
彼らはレムノスより、戦士として格上のはずだ」

デュレン「そうなのか？」

カーナ　「ええ、アドルの言う通りだわ。
でも、戦ってみた感じ、
レムノスのほうが強かった……」

デュレン「なるほどな……
戦士として格上の連中より、レムノスのほうが
強いのは、おかしいってわけだ」

バミー　「ウフフ……
あなたたち……彼のことを何も分かっていないのね」

カーナ　「あたしたちが……レムノスのことを、わかってない？」

バミー　「彼は、戦士として大きな素質を持っているのよ……
それも天才的といっていいほどに」

カーナ　「そんな……
いつも竪琴ばかりひいていたレムノスが⁉」

バミー　「ええ。ずっと人前で本当の力を隠して生きてきたのね」

カーナ　「ど、どうして、そんなことをする必要があったの⁉」

バミー　「ウフフ……
わからないなら、教えてあげましょう。
自分の天才的な力を見せたら、
努力家でひたむきな姉が、傷つくと思ったからよ！
フフフ……アーッハッハッハッ！」

カーナ　「な、何を……言ってるの……？」

バミー　「私は心の闇を見抜き、人を操ることができる魔道師……
彼の、その心の闇を突いて、利用させてもらったのよ。
同情してあげるわ……
出来の良すぎる弟を持つと苦労するわね」

カーナ「そ、そんな……うそよ……」
アドル「カーナ、落ち着くんだ」
カーナ「アドル……レムノスが、あたしのことを
……」
バミー「さて……こう見えても忙しいので
そろそろ失礼させてもらうわ。
ああ、これは忘れずに持って行かないと」
ＳＥ：魔法の音
デュレン「ぬおっ⁉
仮面とレムノスが、向こうに……⁉」
カーナ「レムノス、どうして⁉」
アドル「カーナ、危ない！
まだレムノスは操られてるんだ！」
バミー「ウフフ……一応、お礼を言っておくわ。
こんな場所で、こんな逸材を手に入れら
れるとは
思わなかった」
カーナ「ま、待ちなさい！
レムノスを返して‼」
バミー「さようなら……」
ＳＥ：転送する魔法の音。
カーナ「レムノス～～～～～～～～‼」
デュレン「ああ……消えちまった。転移の魔法か」
アドル「なんてヤツだ……」
カーナ「う、ううぅ……レムノス……」
デュレン「ふぅ……アドル、どうやら、俺たちが
何かできるのは、ここまでみたいだな」
アドル「ああ……」

アドルＭ「魔道師バミー……
それと、仮面を実験させたというやつ
……
いったい何者なんだろう？」
ナレーション「こうして……
ひとまず、事件を解決したアドルたちは、
アサドに報告をしてから、
さらに樹海の奥へと進むのだった」

○シーン18
○コモド入り口／レオ、サンチョ、パンサ

デュレン「ん？　ありゃ、レオ団長じゃねぇか？
驚いたな……
迷いの森を抜けてきたのか」
アドル「グリゼルダ総督と会ったときに、
話しかけてきた人だな」
デュレン「ああ……
あの団長は《雷鳴のレオ》と呼ばれる、
それなりに有名な将軍らしい。
何でセルセタに来たのか分からんがな
……」
レオ団長「よーし、目標の大樹に到着。
ぜんたーい、止まれッ！」
パンサ「サンチョ兄貴～、
ボクもうヘトヘトだよ～。
ああ、おなか空いたな……」
サンチョ「団長のせいで同じ森の中を
何度も行ったり来たりした挙句、
獣に追い回されたからなぁ」
レオ団長「バカモ――ン！！」

あれが樹海での遭難を想定した高度な演習であることに、なぜ気づかん！」

サンチョ「そ、そうだったんですか？」

パンサ「ウソだ、どうせまた適当なこと言ってごまかしてるんだ」

レオ団長「ウソじゃなーい！ どんな困難も前向きに考えるのが、俺サマのポリシーなのだ！」

レオ団長「さっさとついて来い！ さっそく近辺の調査を始めるぞ」

パンサ（小声）「……サンチョ兄貴、ポリシーって何？」

サンチョ「さあなぁ」

レオ団長「何をしておる、早くせんか！」

サンチョ「ア、アイアイサー！」

パンサ「ア、アイアイサー！」

※2人の声を重ねます。

○シーン19

○ハイランドの礼拝堂／リーザと再会

ナレーション「冒険はつづく――大河を越えて樹海のさらなる奥、《始原の地》に辿り着いたアドル。ハイランドという街の礼拝堂で、アドルは不思議な少女と出会うのだった」

リーザ「――眠れないのですか、アドルさん？」

アドル「あ……ええ……」

リーザ「よかった、アドルさん。あなたが生きていてくださって……」

アドル「もしかして、僕を知ってるんですか？」

リーザ「はい……アドルさんには、わたしが誰か分かりませんか？」

アドル「……すみません」

リーザ「寂しいです……まだ記憶を失ったままなのですね。リーザ……わたしの名前です。どうか、そうお呼びください」

アドル「リーザ……リーザか……」

リーザ「アドルさん、もしよろしければ、少しお話しませんか？」

アドル「ああ……なんとなく、思い出したような気がする」

リーザ「……まあ、本当ですか？ ふふ、何だか嬉しいです。あ、あの……それでエルディール様のことは、どれほど覚えていますの？」

アドル「エルディールか……うーん……出会った時のことしか覚えてない、かな」

リーザ「あ、そうでしたか……それでもよかったと思いますわ。そこまで思い出されたのなら、もう、お気づきでしょうか？」

アドル「気づく？ 何に？」

リーザ「エルディール様が、アドルさんを選んで、この地へ招待されたのですよ。塔の《知恵》を授けるために……」

アドル「えっ!?」

リーザ「ただ、《知恵》を授かる前に アドルさんは姿を消してしまわれて……エルディール様がどんな《知恵》を お渡しするつもりだったかまではわたしには分かりません」

アドル「うーん……
なにがあったのかは、覚えていないけど
……
そんなことがあったのか」

リーザ「……私、アドルさんの記憶のことで、
お伝えしたいことがあります」

アドル「え？　もしかして、僕が記憶をなくした
ことに
ついて、リーザは何か知ってるのか？」

リーザ「はい……
全てではありませんが」

アドル「教えてくれ……
どうして、僕は記憶をなくしてしまった
んだ!?」

リーザ「……アドルさん、それは――」

ナレーション「リーザと名乗った少女は、
アドルの記憶にまつわる重大な事実を
語るのだった」

○シーン20
○ハイランドの街／カンリリカと会う

ナレーション「そして、ハイランドの街を訪れたのは、
アドルだけではなかった」

カーナ「……ごめん、アドル。
もっかい説明してもらえる？」

アドル「ああ、カーナ。
何度説明しても、同じ言葉になっちゃう
けど……」

デュレン「やれやれ……こりゃあ、想像以上に途方
もない話になってきたなぁ、
アドル……」

アドル「僕もそう思うよ、デュレン。
たぶん、カンリリカなら、もっと詳しい
ことを
知ってると思うけど……」

デュレン「ああ、この子、カンリリカつったな。
おい、どーなんだ？」

カンリリカ「むむっ、それが人にモノを尋ねる態度で
すか？」

デュレン「ふふん……オマエ年下、オレ年上」

カンリリカ「大人げない人ですね……
年上がエラいなんて考えは、所詮カビが
生えた
過去の遺物です。
あなたみたいな人が年を取ると、ただの
頑固ジジイになるのです」

デュレン「な、何だとう？」

カンリリカ「べー」

カーナ「ふふ、デュレンの負けね」

アドル「すまないな、カンリリカ。
頼むから、もうすこし説明してくれない
か？」

カンリリカ「……まぁ、いいでしょう。
……確かに《知恵》を受け取った人は、
ここでのことは何も覚えていません。
でも、受け取った《知恵》は、その人の
《閃き》へと変わるんです」

カーナ「ヒラメキ？　えーっと……どういうこ
と？」

アドル「……ここで受け取った《知恵》は、
自分の考えとして日常の中で、ふと思い
つくものに変わる……
そんなところか？」

カンリリカ「わー、パチパチパチ……
　お兄さんは話が早いですねー。
　……どこかの誰かさんと違って」
デュレン「フン……!!」
カーナ「なんか、難しい話だよね……
　それはそうと、あたしたち、
　今日は、もう街に出てもいいのかな？」
カンリリカ「そうですね。
　みんなも落ち着いたことだし、
　問題はないと思います」
デュレン「おぅし！　アドル、カーナ、さっそく街
　の中を
　見物させてもらうとしようや」
アドル「ああ」
カーナ「そうね！」
カンリリカ「それなら、このあたしが、
　皆さんに街を案内してあげます」
アドル「ありがとう、カンリリカ」
カンリリカ「いえ……
　あ、ひとつだけ注意することがあります。
　アドルさんたちだけで、街の北に行って
　はダメです」
アドル「街の北……？　あの巨大な塔があるあた
　りか」
カンリリカ「あれこそがエルディール様の住んでいる
　塔なのです。
　アドルさんがエルディール様にお会いし
　たのも、
　あの場所になります」
アドル「あの塔に……エルディールが……」
カンリリカ「塔の周囲は《雷雨の聖域》と呼ばれてい
　て、無断で入れば、落雷であっという間
　に黒コゲです」
アドル「そうなのか」
デュレン「な、なるほど……
　そりゃ、危ないな」

カーナ「そんなとこ、近づかなければいいでしょ。
　さあさあ、アドル、早く行きましょ！」

ナレーション「多くの人と出会い、
　多くの真実を知り、
　失われた記憶は、その形を取り戻してい
　く。
　この《セルセタの樹海》に、どのような
　秘密が
　眠っているのか。
　ひと振りの剣を手にして、
　アドルの冒険は幕を開けたのだった」

Ｆｉｎ



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.95

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社アクア
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

① 1名様
閃の軌跡Ⅳ
プレミアムグラスタンブラー

シックでカッコイイ、超レアなタンブラーをプレゼント!!





② 1名様
『空の軌跡Evolution』
オーブメント型キーホルダー

『空の軌跡Evolution』の重厚感のある豪華な
オーブメント型キーホルダーです!!

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.95プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①『イースⅨ』に期待していることはなんですか？
　アンケート②アドルのパートナーで印象に
　残っているキャラクターは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：イースⅨ最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：イース セルセタの樹海
　ドラマCDシナリオ

応募締め切り　1月28日（月）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。